

# 特集 観音の里 十一面観光

—「み～な」のバックナンバーのなかで一番よく売れたのは？  
「35号（平成7年7月発行）の観音さま特集号です」

今まで何度もそう答えるたび、もう一度観音さまの特集を組みたいなあと思ってきました。

そんなとき、「今年は、高月町の町制施行50周年記念の年やし、観音の里特集、やってえな」と、高月町のスタッフから声がありました。「協力的体制バッチリ組むさかい！」との力強い言葉に、これも観音さまのお導き…と、喜んで取り組むことにしました。

今号では観音の里・高月町の観音さまだけを紹介しましたが、湖北一円、とくに伊香郡周辺にはたくさんのお観音さまがおられ、同じように集落のみなさんによっておまもりされています。観音の里からひろがる、湖北の信仰の奥深さを味わってください。



▲光明寺（東物部）の千手観音立像

- ① 冷水寺（宇根）
- ② 竹蓮寺（西阿閉）
- ③ 観音堂（片山）
- ④ 乃伎多神社薬師堂（東阿閉）
- ⑤ 西野薬師観音堂（充滿寺）（西野）
- ⑥ 正妙寺（西野）
- ⑦ 普門寺（重則）
- ⑧ 松尾寺（覚念寺）（松尾）
- ⑨ 磯野寺（磯野）
- ⑩ 赤分寺（東高田）
- ⑪ 赤後寺（唐川）
- ⑫ 光明寺（東物部）
- ⑬ 高月観音堂（大円寺）（高月）
- ⑭ 渡岸寺観音堂（向源寺）（渡岸寺）
- ⑮ 浄光寺（落川）
- ⑯ 横山神社（横山）
- ⑰ 理覚院（観音堂）（井口）
- ⑱ 円満寺（日吉神社）（井口）
- ⑲ 観音寺（雨森）
- ⑳ 観音堂（保延寺）



## 観音さまのおられる20の社寺

観音さまを拝観するあなたに、前もって伝えておきたいお世話方のごとばがあります。

「わたしたちは、『観音さんの功德を、ご一緒にしましょう』という気持ちで、観音堂の扉を開けています。功德とは、観音さまからいただいたくめぐみや御利益のことです。こうやって世話方をさせてもらうてるのは、御利益をいただいたということでしょうね」

芸術品として観賞するつもりで、お堂に入った人も、知らず知らず、へりくだった気持ちで敬意を持って観ている自分に気づくでしょう。それが「礼拝」の心なのでは、と思います。

### 渡岸寺観音堂

（向源寺）（渡岸寺）

#### 十一面観音立像（国宝）

（黒指定）

JR高月駅から徒歩で十分足らず、木立のなかのお堂におられる国宝十一面観音像は、「どうがんじ」という名とともにあまりにも有名。この像から観音さまを訪ねる旅を始めた人もいるくらいだ。

そんな国の宝ものは、高月町国宝維持保存協賛会によってお守りされている。月に四、五日ずつ交代で奉仕するお世話方は、男性ばかり十八人。世話役になって十六年という執事の梅本峻一さんは、「仏さんに仕える身やで、安らぎがありますね。幸せなことです。」



▲渡岸寺観音堂の境内

毎日、参拝の方が来られますんで、花を絶やさないよう、少しずつずらして畑で育てています。ぎょうさん咲きますと、参拝の方にも持つて帰ってもらえますんや」と、おだやかな口調で語る。

「全国に国宝の十一面観音さんは七体おられますが、うちの観音さんは格調が高いお姿やなと思えます。（同じ国宝をもつ）聖林寺（桜井市）の住職が来られたときも、「女性的なお姿やなあ」と言うておられましたね」

この観音さまの三つの特徴は、

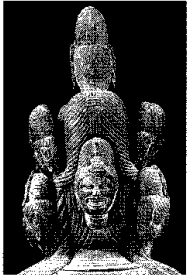
頂上面が善薩面であること、顔の左右に一面ずつ大きな顔が配置されていること、「耳璫」と呼ばれる鼓胴型の耳飾りをつけていること。

四方八方からくまなく拝観させてもらおうと、女性であったり、母であつたり、中性であつたりと、いろんな姿に変化されるように見えるが、真後ろにまわると、「暴悪大笑相」と呼ばれるお顔に驚く。

「この薄気味悪い笑いは、あきらかに悪魔の相であり、一つしかないので、同じく一つしかない如来相と対応しているように見える。……この観音が生き生きとしているのは、作者が誰にも、何にも頼らず、自分の眼で見たものを彫刻したからで、悪魔の笑いも、瞋恚の心も、彼自身が体験したもので



▲身の丈約40cm、上品な顔立ちの十一面観音立像（黒指定）



▲国宝十一面観音立像の後ろ姿。大笑相と呼ばれる顔のそいている

# 観音信仰と観音の里

高月町教育委員会事務局主幹  
高月町立観音の手歴史民俗資料館学芸員

佐々木 悦也



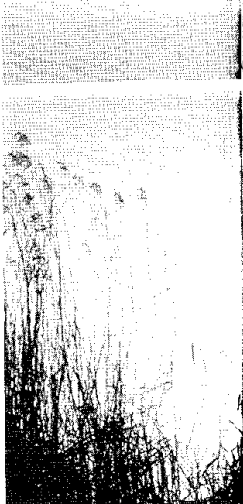
▲湖時の夕暮れ。びわ湖にて。(撮影：内藤又一郎さん)

人にはそれぞれ得手・不得手があるように、ホトケさまにもまたそれぞれ個性があり、ことなつた性格をもっています。たとえば、「極楽浄土に導く阿彌陀さま」、一学力向上には文殊菩薩、「富を授ける弁天さん」などです。これらホトケの中で、古今を通じてもつとも大衆に親しまれ信仰を集め続けているのが観音さまです。

観音さまの特徴は「変身」と「現世利益」。人々を救うため、十二通りに姿を変え、速やかな功徳をほどこすホトケです。しかし、仏教が伝来した頃（飛鳥・白鳳時代）には、観音は現世利益ではなく死者の追善の性格を基調とした素朴な信仰が主流でした。奈良時代に入る

と、観音本来の現世利益的性格が注目されるはじめ、鎮護国家や五穀豊穡等が観音の威力に期待されるようになりました。平安初期には真言・天台宗といった正統密教の伝来に伴い、より多くの変化観音が紹介されました。平安後期以降は浄土教や末法思想の発展に伴って六観音信仰や阿彌陀如来の脇侍としての信仰も盛んになるなど、現世的信仰から来世信仰への転換も広がっていきました。

また、特別の出給をもつ寺院、霊験あらたかといわれる観音が次第に有名になり、貴族を中心にこのような霊場を巡拝する風潮が生まれました。これが平安時代末には「観音経」に説かれる観音の三十三応現身の教にちなんだ、いわゆる「西国三十三札所」にまとめられ、次いで坂東や伊豆など、「西国札所」になぞらえて全国各地に観音霊場が創設され、盛んに巡礼が行われるようになっていきました。湖国近江には、西国札所に含まれる六ヶ寺【正法寺(宮岡寺)・石山寺・園城寺(三井寺)・



長命寺・観音正寺・宝厳寺(竹生島)をはじめ、琵琶湖の周囲いたるところに観音を本尊とする寺院が多く分布し、県下に十数件の札所霊場が存在したことが確認されます。

旧伊香郡域(木之本・高月・余呉町)には、国・県の指定を受ける木造彫刻は三十五件、ことに観音菩薩像が多く分布しています。木指定物件を含めると現行行政大字、木之本町(二十一)・高月町(二十二)・余呉町(二十二)の合計七十九区中、五十の社寺に六十余体の観音像を数え、その内訳は聖観音(二十一)、十一面観音(十七)、千手観音(六)、馬頭観音、その他の観音(四)とバラエティにも富んでいます。中央仏師の手によるとみられる秀作も多く伝わりますが、また地方仏師、あるいは民衆みずから刻んだとみられる、心なごも素朴な像も多数あります。

この地域はかつて、東にそびえる「己高山(標高九三三メートル)」を中心として繁栄した仏教文化圏に属していました。応永十四年(一四〇七)、天台宗の法眼普全によって記された「己高山縁起」(鶴尾寺蔵)によると、「この山は近江国の鬼門にあたり、いにしえより山岳修験の場であった。そこへ

【七六六、八二二】日本天台宗の開祖が訪れ、「白山白翁」と名乗る老人の勧めによって再興した」とあります。

つまり、近江国の鬼門として古代より霊山と崇められてきた己高山は、交通の要所にもあたることから、奈良時代には中央仏教と並んで北陸白山上・而観音信仰の流入があり、さらに平安期に至つては比叡山天台勢力の影響を強く受け、これらの習合文化圏として観音信仰を基調とする独自の仏教文化を構築したことが窺われます。

己高山周辺には、今なお奈良時代末・平安時代初期にさかのぼる仏像を伝えるばかりでなく、花寺・井口遺跡(いずれも高月町)か

らは奈良時代前期の瓦も出土するなど、確かにこの地は早くから仏教文化の栄えた土地であったことがわかります。

平安時代以降、天台傘下として己高山を中心に栄えた湖北の寺々は、室町期頃には弱体化し、かわつて浄土・曹洞・向(浄土・真)・持宗らのいわゆる新仏教が農民勢力の台頭に併せて勢力を伸ばし、戦国の動乱期に至つて、さらに大きく変容していきました。

村々にあった天台寺院の多くは次第に衰退して無住・廃寺化し、そこに残された尊像たちは、宗派・宗旨の枠を越えて、村の守り本尊として民衆に迎えられるようになりました。そして今日なお観音信仰はこの土地に息づいています。

「観音の里」と称されるゆえんは、ただ単に観音像が、また指定文化財が多く存在するからではありません。これらを献身的に守り継いできた民衆による信仰の歴史こそが、真にこの地を「観音の里」とらわめているのです。



▲高月町保延寺観音堂の千手観音立像。背丈わずか17.1cmの素朴な観音さま。反谷寺から来られた、浅井氏ゆかりの像といわれる。